

森の巣箱 夜景



床鍋集落について

床鍋集落は、高知県中西部に位置する津野町の山間にある、人口97名の小さな集落だ。

ゴミの収集車が来ず、救急車や消防車が来るにも他の市町村を経由して数10分もかかり、中心部と比べて行政サービスにも大きな格差のある地区であった。

小・中学校も廃校（昭和58年）、一軒だけあった商店もなくなり廃校から20数年間どうする事もなく明け暮れ、廃校舎の老朽化は過疎に追い打ちを駆ける光景を映し、ここに住んでる事の意味や誇りさえも失われようとしていた。

お店もなく日常生活にも不便をきたし地域のコミュニティも失われ、活気は、なくなっていく。

そうした現状に危機感を持った若者達を中心となり、集落の将来を考えるために会合が行われるようになった。会合の中では「買い物をする場所が欲しい」というニーズや廃校となった小・中学校に対する愛着などが再確認され、廃校を活用して地域を活性化させようという機運が高まった。そして平成12年に、県の集落再生パイロット事

業により廃校舎再利用計画を打ち出し新たなプランの策定に取り組んだ。

閉ざされた暮らしの中で少しずつ希望の光が見え始める。創造や考えがまとまらず、消極的になる事もあったが、そこは行政との二人三脚で様々な形成を作りながら、夢を語り自由な発想で楽しい会合を重ねながら乗り越えてきた。

平行して、村と地域を結ぶ夢のまた夢のトンネル（1080m）が開通し、陸の孤島からも解消され、大きな転機を迎えた。

そして廃校舎は住民のニーズであった食料品や日用雑貨のお店、住民の交流の場、居酒屋やお風呂（温泉）などを取り入れ、形も

特集⑦ 廃校舎の活用

集落福祉の新たな地域づくりに挑戦！



森の巣箱 施設長 大崎 登 (高知県津野町)

コンパクトなたたずまいとなつてリニューアルされた、農村交流施設「森の巣箱」に生まれ変わった。この時点では廃校舎が、これからの観光スポットになる事を、誰も予期することは無かった。

運営に関しては集落独自の運営を取り入れ、行政は関与しない事が条件で、集落が指定管理者となった。私達が自由に管理運営をして行くのだ！住民の利便性向上の施設誕生は大きな喜びにつつまれた。

運営の役割分担は、住民全員が参画する体制を作り、集落の協働運営は、相互扶助で成り立つものであり、お店（コンビニ）の運営には特に慎重に取り組み、経営安定確保のため、各世帯との毎月の利用高の協定を結んだ。運営資金は各戸の出資を願い、400万で運用を始め、職員1名・パート1名の雇用を行い住民は全員「森の巣箱」のオーナーとして運営委員会組織を結成した。



森の巣箱コンビニ

集落ににぎわいがよみがえった！

『森の巣箱』のオープン（平成15年4月）は明るい話題としてマスメディアの取材・報道によりオープン初日から地区外のお客

様が押し寄せて来る想定外の出来事となり驚いた！

接客やレジ対応等のデモンストレーションを行う間もなくパニックになった。やがて旅行雑誌にも紹介され宿泊客の予約が殺到してくる。こんな山の中、何も無い所に何で来るのか、不思議に思いながらも、嬉しい悲鳴を上げながら受け入れを続けた。「宿泊客なんかあるわけない」という思い込みが一転した。廃業になったホテルから無料で布団一式(70組)が調達できた事は何よりの助けとなった。

宿泊客や団体等の予約問い合わせに追われながらも、地域や住民が日々元気に変わって行くのが感じられた。また地域にコンビニや居酒屋が出来た事により生活の利便性も高まり住民同士の交流も活発になってきた。

さらに、イベントなどの企画等積極的な活動をはじめ、地区外からの交流人口の拡大に繋がり、ホテルまつりでは1000人を超える集客となった。

居酒屋は住民の単なる交流の場であったが、宿泊客には最高のおもてなしの場と化



高齢者仕事場



ホテルまつり



結婚披露宴

し住民とお客様との一体感が生まれ、一度きりでなく二度も三度も「森の巣箱」に帰ってくる。

例えば「森の巣箱」から大空に羽ばたく4組の結婚披露宴は住民とお客さまとの交流の場となり、おとぎ話のような、メルヘンチックな感動とローカルテレビの放送で、社会の風習が変わりつつある印象を与えた。

また全国津々浦々で廃校舎の再活用を模索されている市町村や様々な地域づくりフォーラム等で「森の巣箱」の事例発表を行い、多くの繋がりがや人との輪を大切に作り組んで来た。廃校舎がこの様に利用されていく様子が様々な形で全国に発信され、視察研修に観光にと、小さな過疎の集落が今では、ちょっとした観光スポットとして注目をあびているのだ！

交流から福祉へ

しかし、集落にも様々な変化が起きており、これからの地域の将来と人々の暮らしや生活に、どのように向き合って行けばいいのか、10年後も住民が幸せに暮らせる仕組みづくりを考え始める事になった。

その一環で高齢者の生きがいづくりに作業所を開設し、毎日の仕事という日課により高齢者達が共同作業場に出勤し自分の成

果に對して報酬を得る喜び、作業が介護や認知予防に、また集団生活が安心と安全の見守りに繋がり、働く事と、人に喜んでもらえる事で最高の健康が得られる環境を整備した。

また、独居生活者の不安解消や災害時の助け合いなど、住民みんなが支え合い、見守る仕組みづくりを構築し、全戸へのお守りカードの配布と隣近所の関係をさらに親密な関係に取り戻して行く、取り組みを始めた。

集落の活性化を夢見て取り組んできた、この10年間、想定外の大成功を実感している。

地域づくりは決して一人ではできず、閉ざされてきた環境の変化に順応できない人もいる。失われて行くものや、新たに生まれる人間関係で、成り立って来た。

この高齢化社会の中で、住み慣れた地域でいつまでも安心・安全に暮らせる命の絆と地域独自の集落福祉の充実に目を向けることが、高齢者やみんなが幸せを実感できる地域社会の創出と、新たな地域づくり集落福祉の拠点を目指して、「森の巣箱」の第二章は、今少しづつ動き始めた。



居酒屋は住民と宿泊客との交流の場となっている